

令和元年度（指定1年次）

地域との協働による高等学校教育改革推進事業 ＜グローバル型＞

想・創 まほらディア プロジェクト

研究開発実施報告書



九里学園高等学校

想・創 まほらディア プロジェクト

世界に誇れる持続可能な置賜を創造する人材の育成

目的

SDGs を行動基盤としてグローバルな視点でイノベーションできる国際人を育成する

目標

地域におけるSDGs 拠点校として、この地域のSDGs 理解促進と浸透に努め、同時にグローバルな視点でこの地域におけるSDGs 達成のための活動を行うことで、この地域を持続可能で理想的な地域にイノベーションする

ハワイ海外研修
フィリピン短期留学
台湾短期留学
グローバル・サミット



GCP
Edge-Next
グローバルキャンプ
グローバル・タレント



グローバル・ラーニング
α: グローバルな社会課題
β: ローカルな社会課題



教科横断型学習



15分ゼミ

グローバル・ラーニング α: グローバルな社会課題について解決へ向けた提言を行う探究学習

貧困と格差: 絶対的貧困と相対的貧困・日本の子どもの貧困・政策提言

SDGs: 自分たちの生活とSDGs・包摂的な概念・社会の中でのSDGs・達成へのアクションプラン

難民問題: 難民を知るWS (IVY)・難民を知る(AAR)・模擬国連

食料問題: 食料需給の課題・模擬国連

グローバル・ラーニング β: ローカルな社会課題について解決へ向けた提言を行う探究学習

1年 Project Based Learning 2年 Personal Project Learning 3年 Advanced Project Learning

1年 食と健康プロジェクト

有機農業の菊池農園でのフィールドワークを行い、土づくりや農業体験、実食などを通し、その価値や効果を理解し、地域課題の解決を目指す。
高畠オーガニックラボにて成果を発表。

1年 子ども食堂プロジェクト

NPOの子ども食堂の手伝いを行いながら、生徒たち自身での子ども食堂を開設し、持続可能で地域に必要な子ども食堂の在り方を探究する。
国際ESDシンポジウムにて成果を発表

1年 多文化共生プロジェクト

グローバル・カフェを開き、留学生と対話を繰り返しながら、彼らと協働で外国人にとっても住みやすい共生社会の構築をめざす。
山形国際理解フォーラムにて成果を発表

2年 Personal Project Learning × ハワイFW

ハワイでの持続可能な社会の創造をテーマとしたフィールドワークやインタビュー調査を組み込んだ個人での課題研究

3年 Advanced Project Learning

2年次の課題研究を英語の論文にまとめる一方で、1、2年生のゼミ形式の探究学習のメンターとして助言、個人のスキルアップを図る

G
C
P

グローバル・キャンプ地球塾

山形大学の留学生とSDGsをテーマとしたワークショップに取り組んだり、異文化理解に努めたりする協働学習

英語(多言語) × SDGs × 思考・創造

グローバル・タレント塾

グローバルに活躍する国際人の講話やワークショップを行い、国際人としてのマインドセットを図る

キャリアデザイン × 志

山形大学Edge-Next

山形大学の起業家育成プログラムに参加し、イノベーションマインドを涵養し、ソーシャル・ビジネスを学ぶ

アントレプレナー × イノベーション × 世界

教科横断型学習

グローバルでの学びと教科での学びをリンク
食と健康 × 家庭 貧困 × 国語 × 英語

15分ゼミ

毎週木曜日、4～5人一組のグループで行う。担当者が新聞記事をもとにSDGsの視点からレジュメを作成し、話し合いを行う。

グローバル・サミット in 台湾

台湾の高校生と探究学習の成果発表意見交換会及びSDGsのワークショップを行う

九里学園高等学校
プログレス・コース

1～3学年

「グローバル・ラーニング」

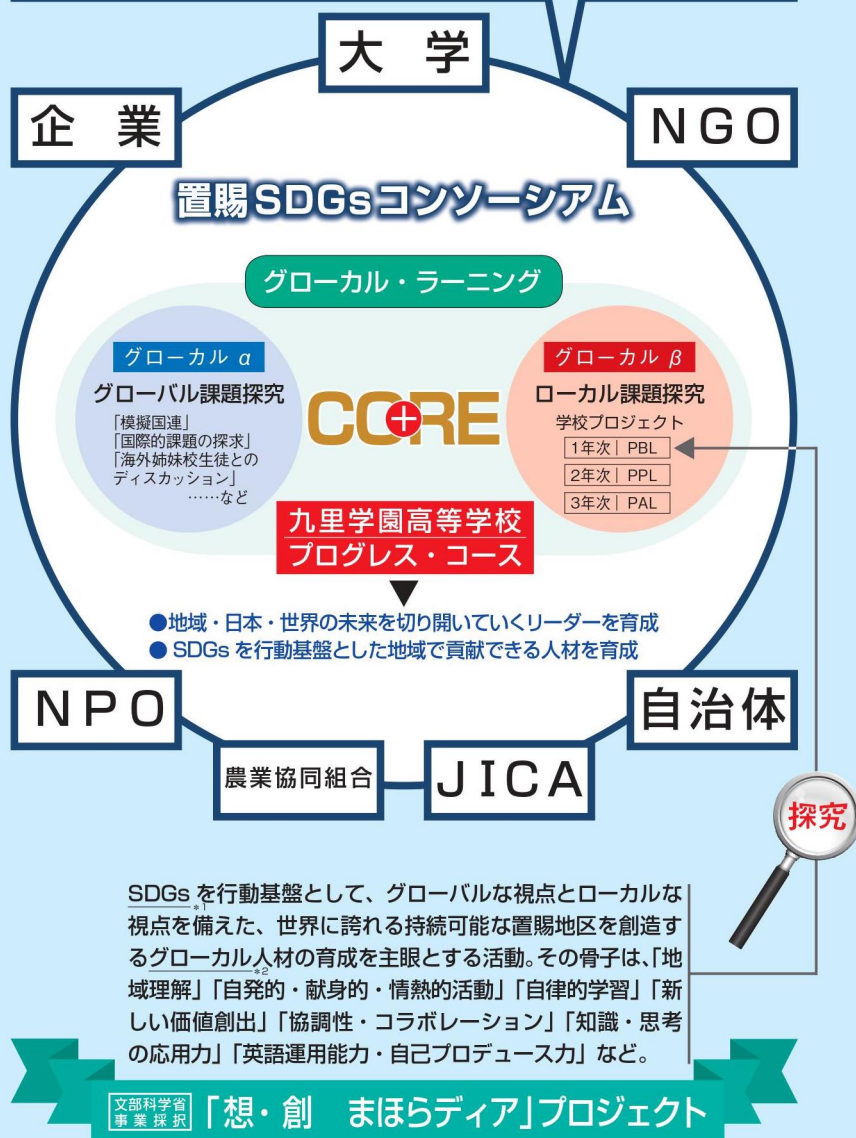
九里学園高等学校は、大学進学希望者を対象とするプログレス・コースにおいて「グローバル・ラーニング」という探究活動を推進しています。在籍する生徒たちは、同校独自のアプローチにより、さまざまな外部団体・機関や企業、大学、NPOなどの協力を得て、実社会や地域コミュニティと密接につながる広く深い学びで成長を遂げています。

「グローバル・ラーニング」が醸成する視点・行動力。
地域理解が世界を身近にし、自分を大きく成長させる。

学校基本情報

所在地 〒992-0039 山形県米沢市門東町1-1-72
URL <http://kunori-h.ed.jp/>
交通 JR米坂線「南米坂」駅下車、徒歩18分。
 JR「米坂」駅下車→山交バス（白布温泉行）乗車後「上杉神社前」下車、徒歩2分
校長 九里 廣志
生徒数 男子266名、女子251名

コンソーシアムで「置賜地区」で協働する団体、またタイミングによって協働する団体等。バランス良く配された「産・学・官」外部機関との多様な連携が「学び」の軸となっている



九里学園高等学校には、元来、課題研究に取り組む土壌がありますが、平成27(2015)年度に、文部科学省から「SGH(スーパーグローバルハイスクール)アソシエイト」として位置づけられた後は、より本格的な探究活動への取り組みにシフトしてきた流れがあります。探究学習を主導する鈴木 精先生は、その当初から探究学習を構築・牽引しており、さらに平成31(2019)年度からスタートした「まほらディアプロジェクト」を担当・統括。日々、精力的に生徒の指導に当たっています。鈴木先生に、九里学園高校の探究学習についてお話をうかがいました。



鈴木 精 先生

教育内容充実課・グローバル教育主任・地域協働推進事業研究開発推進委員長



2種のグローバル授業で体験・考察、リンクして発展

グループ活動、個人研究、英語発表。

移行する3年間の「グローバル授業」

本校の「プログレス・コース」で行うグローバル・ラーニングの授業は、「グローバル α 」(以下、 α)と「グローバル β 」(以下、 β)に分かれ、いずれもフィールドワークや体験的な学びを重視しています。全体としては週3時間を割いており、 α は週2時間で「模擬国連」や海外姉妹校生徒とのディスカッション、SDGsにおける課題探究などによりグローバルな視野を養います。

β は週1時間で地域の課題を探究しますが、学年により学び方が異なります。1年次は学校プロジェクトにグループで取り組む「PBL」(Project Based Learning)。現1年生は、本年度スタートした文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の「グローバル型」として採択された「想・創 まほらディア」プロジェクトにおいて探究学習を進めています。

2年次は、生徒全員が課題を見つけて探究する個人研究「PPL」(Personal Project Learning)に取り組めます。自分で課題を見つけるのが難しい生徒もありますが、1年次の α と β でさまざまなプログラムを体験することで、できるだけスムーズに興味・関心を引き出すように配慮しています。検証段階ではありますが、様子を見てみると、ワークショップや模擬国連では問題に入り込んで、感情移入するケースが非常に多く見受けられます。現2年生は、どちらかというと1年次の α で学んだ難民・移民やSDGsのテーマ、格差・貧困といった社会的な課題から、探究対象を見つける生徒が多い印象があります。2年次の最後には、その成果をまとめて発表します。

3年次の β のポイントは、成果を英語論文で発表する「PAL」(Project Advanced Learning)への取り組みです。SGH課題研究

フォーラムなど、校外発表の機会を多く設けて、他校や外部団体と接触し、さらに広い視野を身につけることを期待しています。

学年縦断型で展開するグローバル学習 3年生はリーダーシップの獲得機会に

グローバル授業の特徴の一つは、学年縦断型であることです。取り組む内容や方法は学年や個人で違っていても、一緒に空間で学ぶことで、3年生は2年生の課題研究や1年生の学校プロジェクトに対する助言なども行います。課題が学年を超えて引き継がれている場合もあり、自分たちが受けてきた指導経験をベースに、教員と同じ視点で下級生に疑問を投げかけたり、アドバイスをしたりしています。それにより3年生は、自分の研究を別の方向から見直すことが可能となり、また「リーダーシップ」という新しい資質・能力、批判的なものの見方などを獲得するトレーニングの機会にもなっています。

探究により大きくなる「学びの器」 目指す進路への目的がより明確に

グローバルの学習スタイルを導入して数年が経ちますが、その成果も見えてきています。強く感じる効果の一つは、「学びの器」が大きくなるということです。探究にしっかりと取り組んだ生徒は、受験勉強を含め、さまざまな知識をたくさん詰め込んでくれば落ちることがありません。自分で器をどんどん広げていくためインプット量が多い。従って、私たち教員側の投げかけに対しても、すでに定着した多様な知識、あるいは体験などと関連づけながら、自分の中で咀嚼・吸収していきます。学びが広く深くなり、自然に学力も伸びているようです。まさに「学びの器」が大きくなり広がっていくイメージです。

探究学習による最も大きな変化は、進路先の選び方かもしれません。



例えば、ある生徒は、探究で社会課題を扱ったことで、「企業が変わらなければ、この問題解決は難しい」と考え、それなら「企業経営の在り方を学んで、企業で社会課題の解決に携わりたい」と、経営学を学べる進路を選択しました。また、地域課題に取り組もうと決めた別の生徒は、それらを学ぶために、地元の山形大学に進学したいと、将来をしっかりと見据えることができました。こだわりと目的意識を明確に持って、進路を考えるようになった端的なケースです。

「行動力」がより高まる効用も期待 タテの変化を学校全体に波及させたい

生徒たちからは、「行動力がついた」「学ぶことが楽しくなった」と聞くこともあります。部活動をするために入学したのに、探究のほうが楽しくなった生徒、1年次の学びだけでは満足できず、2年次進級を目前にした春休みに自らフィリピンに渡って、ゴミ山で暮らす子どもたちと一緒にフェアトレード製品づくりを手伝った女子生徒、難関大学のAO入試で臆することなく自分をアピールして、チャレンジしていく生徒など、頼もしい事例が相次いでいます。探究活動やグローバル学習が生徒たちの新しい可能性を引き出しているのでしょう。

模索は続きますが、今後は、この結果をさらに教科横断で実施できたら良いですね。グローバルの授業だけではなく、各教科に落とし込むことができれば、より大きな効果が期待できます。最終的には、学校全体に波及させていくのが目標の一つです。

探究

「想・創 まほらディア」プロジェクトに取り組む3年間

文部科学省が主導して令和元年度にスタートした「地域との協働による高等学校教育改革推進事業・グローバル型」に指定された「想・創 まほらディア」プロジェクト(以下、まほらディア)は、「プログレス・コース」の現1年生から3年間で取り組む探究学習です。テーマは、平成27年度からSGHアソシエイトとして積み上げてきた先輩卒業生たちの探究の成果を引き継いでいます。具体的には、「食と健康」「貧困」「多文化共生」の3つ。いずれもグローバルな事象と相関関係が深く、さらに学校周辺の地域(置賜地区)で考えるべき課題として浮き上がってきたものです。

「まほらディア」の大きな特長の一つは、九里学園高等学校が核となった上で、外部団体等と連携するコンソーシアムにおける協働ですが、各テーマはその協働関係を活用したプログラムからスタートしています。1年生の前回は、現状を認識するために全員がすべてのテーマについてフィールドワークやワークショップなどで全体像を把握。後期からは、各自の興味・関心があるテーマごとにグループに分かれて探究を進めました。

テーマ① 食と健康

フィールドワークで体感・考察

「まほらディア」プロジェクトのスタート時に行ったのは、隣接する高畠町の地域創生プロデューサーと有機農家の方から、これまで取り組んできた過程や、現在抱えている課題などの話を聞くことでした。その中で、生徒たちは実際に何が課題となっているのかを理解し、自分たちはどのような問題意識を持っているのか、どのような課題をテーマとするのかを抽出していききました。

「食の良さ」「有機農業の良さ」などについて文献や大学と協働研究などで検証しながら、外部の方々の協力を得てフィールドワークを行うことで、「後継者問題」や「普及」などの課題を見つけていくというように、スモール・サイクルの積み重ねにより一層傾注しました。

テーマ② 多文化共生

グローバル・カフェで課題を発見

米沢市は地域の国際化を目的に外国から国際交流員を受け入れており、その方を招いてのワークショップから探究学習は始まりました。災害時、外国人に対する情報の流し方や炊き出しなどについて考え、実際に参加した上でどのような方法がベストなのかを一緒に考えました。

それを受けて、ひと月に一回、「グローバル・カフェ」を開き、山形大学の留学生が抱えるさまざまな問題を話し合いながら、米沢で共生社会を



構築するためにはどうしたら良いのかを探ることになりました。

そこで出てきたのが、文化の違いに起因するコミュニケーション不足の問題です。留学生からは、日本人はほかの国の外国人と一緒にいる環境に慣れていないため、意思の疎通が難しいところがある。外国人にふれる機会を増やしたほうが良いとの意見が出されました。

確かに日本人は外国人に臆する人が少なくないし、英語ができないと会話が成立しないと考える傾向も否定できない。しかし、日本語が上手で十分に話ができる外国人もいることに気づくだけでも違うのではないかと意見が挙がってきました。そうした意見交換が出发点となって、「グローバル・カフェを外国人とふれ合う場として機能させる」という発想につながりました。

また、病気の時には、外国人も困るけれど、実は受け入れ側も困ることがあるだろうと考え、市立病院などに行き、医療関係者に話を聞くフィールドワークも行いました。

テーマ③ 貧困

生徒自身による「子ども食堂」開催

今年度は「子ども食堂」についての探究です。数年前の先輩たちが行った相対的貧困と絶対的貧困の探究が「子ども食堂」に行き着きました。それを現3年生が引き継いで、子ども食堂に対する「偏見の有無」と「認知度」などを調べました。その結果、この地域では「子ども食堂に対する認知度が低い」ことが分かったのです。また「子ども食堂は効果をもたらすものの、実際には活動の継続が難しく、閉鎖を余儀なくされる場合がある」という厳しい現状があることも

「食と健康プロジェクト」

第2回 フィールドワークのまとめ(音読)

●生徒の感想

「畑の土がふかふかしていて栄養があり、その畑で育つ作物は、高ミネラルで栄養があって健康に良いことを知った」
「地元の新鮮な食材が豊富にあっても、それを昔ながらの料理に適切な調理をできる人が少なくなっているという地域問題に気がつくことができた」

●生徒の意見

「無農薬栽培の作物を育てて食べる取り組みが、地域課題の解決につながるかもしれないと考えた。高齢者が食から元気になり、医療に頼らなくても元気でいられる仕組みがあると良い」
「農業者は作物を美味しく作ることに集中しているが、その作物を活用して正しい生活の仕方を教える人が必要。アドバイザー的な人材を育成すべき」

●いますぐ自分たちにできること

「高ミネラルな玄米(薬元米)やゲンキナを食べる」
「家族や友人に実際に体験した収穫や料理の美味しさなどを含め、有機農法や有機栽培の作物の素晴らしさを伝える」



*1 SDGs

2015年9月、国連サミットで採択された16年から30年までの国際社会共通の目標。持続可能な世界

を実現するための17のゴール(貧困、飢餓、教育、不平等、消費と生産など)と169のターゲットから構成されている。

*2 グローカル(Glocal)

グローバル(「地球規模の」)「世界規模の」という意味のGlobalと、ローカル(「地方の」「地域的な」と

いう意味のLocal)を組み合わせた造語で、「地球規模の視野でものごとを考えつつ、地域視点で行動する」という考え方のこと。



■文化祭で「食と健康」×「多文化共生」×「貧困」の3テーマの融合が実現！

文化祭の「子ども食堂」プレオープンでは、「まほらディア」における3つのテーマが融合し、一つのカタチになりました。

食材は、「食と健康」プロジェクトでお世話になっている農家の方が、趣旨に賛同して有機農業で栄養価が高いもの、ゲンキナや粟元米を提供してくださいました。生徒たちは、そうした素材の良さを紹介しようと工夫を凝らしました。

「多文化共生」プロジェクトからは、「地域の人たちとふれ合う機会が少ない」山形大学の留学生たちが参加。ブースを設置して、外国に関するクイズを出したり、外国のおもちゃを紹介して、参加者たちと共に楽しみました。

「まほらディア」は3年間をかけて、最終的に3つのテーマが相互に連携していくことも一つの目標でしたが、初年度から

関連性を持たせることができたように思います。それを可能にした要因には、1年次の前期に生徒全員がすべてのテーマについて学んだこと、そして知識や意識を共有した効果が大きかったのではないかと考えています。各テーマが、想像力や視点の転換により、相互につながる実感が得られたことは、生徒たちにとって大きな



◀文化祭における「告知課題」を改善。クリスマスの時期の「子ども食堂」告知のためのチラシを作成

収穫でした。

文化祭では、学校のポスターの中で、子ども食堂である「くのりKIDS 食堂」の開催を告知しました。今回はもう少し認知度を高められるような告知が課題です。今回来場した・しないに関わらず頭の片隅にイメージを残すことができないのか。そこから、クリスマスパーティの「子ども食堂」を告知する印象的なチラシ作成に結びつきました。市内の小学校および学童保育に掲出をお願いしました。

分かりました。

そこから得られた結果をテーマに、令和元年度新入学の1年生は「子ども食堂はどのようにすると持続可能で、偏見をなくして続けていけるのか」を課題として設定しました。その一環として、「この地域に必要なのはどのような食堂か」を考えるために、生徒たち自身で「子ども食堂」のオープンにチャレンジしました。

そのチャレンジは、この地域で「ゆあら 元気子ども食堂」を運営しているNPO法人の力添えがあって実現したものです。NPOのスタッフから子ども食堂に関する課題は、生徒自身で子ども食堂を運営・開催することで見えてくるはずだ。高校生にしかできない食堂ができれば、良い学びになるのではないかとのご提案があり、生徒たちも「ぜひ、やりたい！」と火が点いたのです。初めは、NPO主催の子ども食堂で必要なノウハウを学び体験を積みました。そこから文化祭でプレオープンという形で、実際に学校で「子ども食堂」を開いたのです。

子ども食堂を学校で展開するメリットは、遊ぶ場所がたくさんある

ということ。高校生のお兄さん・お姉さんとサッカーをしたり、折り紙をしたりと、一緒に遊んで楽しかった親近感を持ってもらえるように工夫をしました。「人とつながれた」と実感できることが、仮に将来、社会的弱者の立場になった時に役に立つだろうという文献からの知見を得ていたため、余裕のある人間関係をつくりたいとの想いがあったのです。

また、親近感や楽しさが口コミで認知されることで、少しずつではあっても本当に必要な人たちに浸透していくのではないのだろうかという、生徒たちの仮説の下で行われた試みでした。

地域社会との密接な交流・協働で高まる「探究」に対するモチベーションと自信

地域に実際に出かけ、フィールドワークを重ねていく流れの中で、生徒たちの意識が高まるが多くなっています。

例えば、「多文化共生」の生徒たちが、市立病院で外国人とのコミュニケーションについて尋ねると、ご対応いただいた看護師の方が「すごいことに取り組んでいるね!!」と言っ

てくださったそうです。私たちは、お忙しいところ申し訳ないと恐縮していたのですが、とても褒めてくださった。「食と健康」で訪ねた農家のおじいさん・おばあさんは、フィールドワーク後に行う考察をまとめるワークショップで、「自分たちが気づけなかったことを感じてくれて嬉しい」と感心してくれました。地域みなさんから頂戴するそうした肯定のお言葉や客観的な評価が、生徒たちのモチベーションや自信の醸成につながっていきます。「外に出る」って本当に大事なことなんです。

地域文化の伝承の面からも、得難い経験をしています。有機農業で収穫した食材を試食しようと、サロンで居場所づくりをしている主婦のみなさんが郷土料理にアレンジしてくれた時には、食材の調理方法や漬物の方法を教わりました。生徒たちは知的財産を受け取ったわけです。生徒たちの学びに貴重な付加価値を与えてくれました。地域社会が生徒を育むことに、改めて気づかされた瞬間です。探究は2年次から3年次へとまだまだ続きますが、それを支える力にもなっています。

*3 SGH（スーパーグローバルハイスクール）アソシエイト
グローバル・リーダー育成に資する教育を通して、生徒の社会課題

に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を醸成し、将来、国際的に活躍できるグローバル・リー

ダーの育成を図る文部科学省主導の事業構想を広めていく高校のこと。目指すグローバル人物像を設定し、国際化を進める国内外の大

学を中心に、企業、国際機関等と連携を図り、社会的課題、ビジネス課題をテーマに横断的・総合的な学習、探究的な学習を行う。